
モンスター・ハンターズ・ストーリー

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスター・ハンターズストーリー

【Zコード】

Z6327C

【作者名】

コニ・タン

【あらすじ】

知らない人にも分かりやすくしようとしたけど、最近なんか吹っ切ってきたモンハンの二次創作です。オリジナルモンスターや独自の解釈などもありますので、そういうのが苦手な方は御注意です。物語の展開は……旅をしています、もうこの部分が既にモンハンっぽくないですね（笑）

その1・幼き日の憧れ（前書き）

プロローグのはずが本編並みに・・・・作者も予想外です（笑）

その1・幼き日の憧れ

ハンターなんて意氣地なしだ。

「よお、坊主。今日もきてるのか

ここはモンスターの討伐依頼を受けるための場所、ギルド。それは
すだ。
だがここにいるのは酒を飲んでばかりの意氣地なばかりだ、確かに
ギルドは飲み食いも出来るようになつていてるが酒場ではないはず
だ。

「おっさんー北の火山にリオレウスが出たんだぜー！」

机の一つを占領して飲んでばかりの竜^{ハンター}狩人に俺は大声で告げた。

「それがどうした、俺は狩りてえ時にやりてえよつて狩るだけだ。」

この壯年のハンターは俺の憧れだった。

昔一度だけ街の捷を破り一人で外へ出たことがあった、忠告は聞く
ものだ、そのための忠告なのだから。

案の定、俺は肉食モンスターの群れの長、ドスランポスに見つかり
危うく死にそうになつた。

その時たまたまその場に居合わせ、俺を助けてくれたのがこのハン
ターなのだ。

俺の憧れ、ハンターという者の本質を見た気がした。

それなのにこのハンターはあれ以来ほとんど狩りに出ていないのだ。

「どうしてだよー? おつをさせりオレウスとやるのが怖いのか! ?
どうしておつをさせり戦わないんだよー? 」

そうこうで、俺は逃げるようになにかと化したギルドから飛び出した。

かとこいつてやる事もないので結局は酒場の前に座つてこるのが。

「アイン……またなの? 」

「うわせえよ、リーネ」

俺の隣におとなしそうな顔をした女の子が座る、幼馴染おさななじみのリーネだ。ちなみに悪友でありギルドの受付嬢の娘であるため、前に外に出る手引きをしたのはこいつだつたりする。

リーネがハンターが狩場に向かうために使う馬車に付き添い、俺が荷物の中に隠れて狩場に出たのである。（そのハンターがおっさんだった訳だ）

……そうだ。昔のことを思い出したおかげでいい事を思いついた。

「リーネ、また前みたいに外に出る」と、できるよな? 「

リーネは悲つたような顔をしたが、俺の顔を一度見ると田を逸らして言つ。

「出来ない事は……無いけど……」

そして今日の夜、あのリオレウスを狩りに行くメンバーがいると聞いてそれに潜り込むことにした。

見てろよ、おっさんが狩らないなら俺が狩つてやるー。

「アイン、もう出でいいよ」

外からリーネの声がする。それに応じ、俺は袋の中から出る。

「ふつー！アイン・・・それやつぱり変ー！」

「笑うなー！これが一番！」一りてきなんだー！」

俺の完全武装を見てリーネが笑う。

頭に鍋のふた、手には包丁、胸には未加工の鉄板、腕には自分で作った手甲を付けている。

俺の家は鍛冶屋で日用品でも十分に頑丈に作つてある、まあ雄火竜おすかりゆうとまで言われるリオレウスの火炎を防げる保証は無いが。

「いつまで笑つてんだ！俺は行くぞー！」

「くすくす、くすくす、くすくすー！」

「くすくす、くすくす、くすくすー！」に恥ずかしい思いを抱きながらも俺は馬車から下りる。

しかし前を向いた瞬間に今まで感じたことの無いような熱風、家の鍛冶場でもここまで熱は持たない。

目の前に巨大な生物が舞い降りて来る事を示す大きな影が出来る、

まさか

「リオレウス！」

リーネが叫ぶ、目の前では手負いのリオレウスが着地したところだつた、おそらくハンターが仕留め損ねたのだろう。最悪だ、ここにはリーネがいる、自分だけなら死んでも挑む気だつたのだがリーネを巻き込みたくない。

それに

「あ、ああ・・・」

情けない事に足がすくんで立てなかつた。

雄々しい紅い甲殻からだに両方合わせて本体の2倍はあろうかと言つ翼、長く力強い尾には太く鋭い刺が付いており、極め付けは獲物おれを見つめる紅蓮の両目。

やられるとしてもせめて一撃は入れてやるうつと思つていた、だが情けない事に本物の飛竜ひづりを目の前にすると全然体が動かない。

ギャアアアアオオオオ！

リオレウスが空に吼える、喉が渴く、頭は真っ白で昔の事がぐるぐる回つっていた、死を、覚悟した。

だから気が付かなかつたのだろう、自分の背後より走り出る騎馬の存在に。

硬い物が堅い物を切り裂く音、火竜の悲痛の叫び、そして鎧に身を包んだ懐かしきその姿。

「お・・・おっさん・・・」

声を振り絞り、からつづじてそれだけの言葉が唇から零れ落ちた。

「あんまり親を心配されるもんじやないぞ、ホレ」

壯年のハンターが懐から取り出した紙は依頼クエストが書いてあるものだった。

紙の一分には「「うちの子を探してください」とある、もちろん俺の親からの依頼だった。

「お、おっさん、おっさん。ふ、ふええ・・・」

それから俺は鎧姿のおっさんにだらしなく泣きついた、おっさんも特に何も言わず優しく頭を撫でてくれた。

「飛竜も無限にいるわけじゃあ無い。若い者おっさんに経験を積ませたくてあんまり狩つて無かつたんだがな、おめえを落胆させたよつて悪かつた。」

「おっさんはそれだけを呟き、俺が泣き止むのを待つてくれた。おっさんの武器が伝説級の巨大龍の素材で作った武器、龍刀りゅうとうだと知つたのは後のことだ。

俺がハンターになる事を決意した夜の出来事だ。

その1・幼き日の憧れ（後書き）

長いですがここまでがプロローグです、次から本編が始まります。モンハン好きの方もそうでない方もお暇ならこれからも読んでやってください。

その2・沼地の戦こと夢への一步（前書き）

ゲームで「いやむやな所などは独自の解釈により執筆を行つております
よ、」と承へだせ。

その2・沼地の戦いと夢への一步

ここは湿つた空氣と濡れた草、半分泥の地面が支配する領域、沼地だ。

その草の陰に隠れて鋭い眼光で開けた場所の中心を睨む影、それは青年だった。

それなりに経験の積んだハンターなら倒した飛竜の体を加工した武器や防具を身に付けているものなのだが、その青年は残念ながら金属製の鎧に金属製の武器である。

その青年は駆け出しハンターの定番鎧とも言える《バトルシリーズ》を身に着けていた。

なぜ「シリーズ」と言つ名前なのかと言うと、ハンターの鎧は軍隊の物と違つて頭、胴、腕、腰、足の五つの部位に分けて作られていて、それらの一括した名称が「シリーズ」なのである。

ちなみに分けられている理由は簡単、全てを初めから買い揃える事が出来る者などいないからだ。

軍人は豊富な資産で鎧を買い揃える事ができるが駆け出しのハンターには不可能、つまりこの青年は駆け出しながらも「駆け出し卒業間近」といつたところだろうか。

青年は眼をより細めてある一点を凝視する、大きな陰のある場所を。

「来たか・・・・・ゲリヨス・・・！」

沼地に生息する毒怪鳥の名を青年が呼んだとき、それは起つた。正にその毒怪鳥 ゲリヨスが影のあつた地点に舞い降りたのである。これを見た人間の第一印象はほとんどが「なんて間抜けな顔だ」となるだろう。

少し膨らんだ体系に飛竜に必須の翼、丸みのある尻尾と、さらに先程述べたように間抜け面をしていて頭の上には淡く光る鷦鷯冠とわがくがある、ちなみに体色は青だ。

「つおおおおお！」

ゲリヨスが完全に降り立つたのを確認し、青年は己おのが背の絶対の信頼を置いている物、武器の大まかな区分で太刀たち、細かい区分で鉄刀と呼ばれているそれの柄に触れた。

そして走る、ゲリヨスが気付いて雄叫びを上げるがもう遅い。

青年の太刀がゲリヨスの右翼の付け根を捉えていた。

グギヤオオオ！

悲鳴を上げたゲリヨス、見れば体中に刀傷がある、青年に追い詰められたのだろう。

切創を増やしたゲリヨスの目の周りが、突然赤く輝いた。

これはゲリヨスの特徴で命の危機に瀕した時、目の周りが赤くなり敏捷性が上がるのだ。

太刀を振り切つた直後の青年はまつたく反応する事ができず、目の周りを赤くしたゲリヨスの突進を食らつた。

大きく吹き飛ばされる青年、普通ならばアバラの2・3本は確実に持つていかれているだろう。

しかしハンターを普通の人間の枠に当てはめて考えることは出来ない、現に青年はすぐに立ち上がり、そして腰の辺りを探り出した。その間にもゲリヨスの突進は続く。

まったくでたらめな方向に進んでいるが、毒を吐きながら走るのでハンターに恐れられている連続突進だ。

それを避けながらさらに腰の辺りを探る青年、どうやら田当ての物が見つかったようでそれを顔の前に掲げ一気に飲み干した。

それはハンターの間で『回復薬』と呼ばれている物で、飲むと戦闘に支障の出ないように体の傷を癒してくれる。

原理は知られていないがハンターなら一度はお世話になる道具だ。

青年が回復薬を飲み干した時、ゲリヨスは既に次の行動に移つていた。

目をつぶつても瞼を突き抜けるほどの閃光を鷦^{かいかく}冠から放つのである。それの影響を無くすには後ろを向いて回避行動をとるか

「させらかつ！」

青年のように攻撃で行動を止めるしかない。

距離はおよそ5メートル、その距離を一瞬で縮め青年は愛刀をゲリヨスの鷦^{かいかく}冠の付け根に叩き込む。

先程よりも大きな悲鳴を上げたゲリヨスの頭から鷦^{かいかく}冠が無くなつていた、青年の一撃により切り落とされたのだ。

「これでつ、止め！」

鷦^{かいかく}冠を切り落としたままの流れで刃を下に向ける青年。

そのまま降ろされた太刀はゲリヨスの頭の中心を捉え、刺し貫いた。

「よ、よつしやあああ！」

断末魔の悲鳴さえ上げられなかつたゲリヨスの姿を前にして、青年は勝利の雄叫びを上げた。

ギルドのカウンターに座つていると退屈だ。

まあ夜は退屈など頭の片隅にも無いほど忙しくなるのであって、つまりこの仕事、ギルドの受付嬢は忙しさが極端なのだ。

街を出てリオレウスに襲われたあの日から早8年、18歳になった

私はリーネはギルドの受付嬢をしている。

受付嬢の娘が受付嬢になると、我ながらここまで順当にいくと微妙な心境だ。

私の身近に、家業を次男に押し付けてハンターになった馬鹿な親友がいるからその思いは深くなる一方だ、でもまあ彼の手助けをしたくてこの仕事を選んだのだけれど。

「あ～！疲れた～！」

そんな事を言いながら鎧姿でギルドに入つてくる者がいる、噂の彼アインだ。

「討伐」苦労様、アイン

営業スマイルを浮かべて出迎える、アインを助けるためにこの仕事を選んだのだとして、公私はきちんと分けるぐらいの節度は持っている。

「あ～、うん。とりあえず水ちょうどいい、沼地の水は汚くて飲めねえや」

その言葉に返事を返して水を汲んであげて、サービスとしてまかない料理の草食獣のアフケロスの切り落とし丼をつけてあげる。

公私を分けるなんて前言撤回、だつてアインは悪友ですもの。

彼の座るテーブルに食事を届けた時、背中の荷物入れから飛び出た輝く物を見つけた。

「それってマカライト鉱石じゃない！ 討伐に行くなんて言つて鉱石掘りにいつてたの？」

マカライト鉱石とは綺麗な青色をした鉱石で、鉄鉱より質の良い素材としてハンターの武器や鎧に広く使われている物だ。

「ちげえよー。ゲリヨスの頭を落としてきたんだ！」

そこまで言わされて思い出した、確かゲリヨスは鶏冠の光を増すために鉱石を鶏冠に溜めることがあるのだ。

「これで俺の鉄刀を強化するんだ、次はようやくリオレウス！ 人を集めないとな！」

アインは1年前に本格的にハンターを始めてから様々なモンスター

や飛竜と戦い、勝つてきた。

ドランボス
首領肉食獣、

ヤンクック
大怪鳥、

ドスガレオス

パーティー
大砂竜、そして今回の毒怪鳥。

そろそろ集団でならリオレウスに挑んでも良い頃だ。

彼はあの日からリオレウスを狩る事を目標にハンターを続けてきた、ここまで上り詰めて早くリオレウスを狩りたいと思つてはいるはずだ。そして私はそんな彼の夢を手助けしてあげられる。

「ねえアイン。リオレウスを狩るつもりなら良いお話があるんだけど」

「？」

「2日前からリオレウスの討伐依頼を請けてまだ出発していないパティーがいるの、二人しか集まつていなかからきつと入れてもらえるはずよ」

「本當か！？」

依頼は請けてから5日間、仲間を集める猶予が得られる。

理由としてハンターは街から街へ歩いて依頼を請け負う者がいる、そんな人はたいてい一人で行動しているので現地で仲間を集める、そのための猶予期間だ。

そしてそんな事が間々（まま）あるため、たいていのハンターは実力の伴う者が入る場合は歓迎される事が多く、二人で挑むより三人で挑んだ方が生き残る確率も上がるのだから。

「そいつらはどこにいる一場所を教えてくれ！」

アインはその話題に激しく食いついた、目標のリオレウスとこんなに早く戦えるのだから嬉しいだろつ。

「え～っとね、隣の宿の・・・」

この時はこれがアインと私の運命を左右するのだとと思つても見なかつた。

その3・H者に挑む仲間たち！

私の隣には緊張した面持ちのアインが座っている。

太刀の柄には【禊^{みそぎ}】と銘が入っていた、昨日の内に鍛え直したのだ。さらに防具は大怪鳥と呼ばれる飛竜の素材で出来た《クックシリーズ》だ。

昨日、リオレウスの討伐依頼を請けたパーティーがあるとアインに告げると、早速その人たちに会いに行こうとしていた。

しかしギルドから出る間際、せっかく鉱石を手に入れたからには強化してから会つたほうが良いと思い直したのである。（その際に加工を頼んでおいた鎧も受け取つたらしい）

強いハンターが手助けする分には良いが、弱いハンターと組んで共倒れした者も少なくない、自分を少しでも強く見せないと相手方に断られるかも知れないと思つたようである。

そして私が出発を一日待つてほしいといつぱんを伝えると快く承諾してくれたのだ。

ギルドで昼過ぎに会つ約束をしてるのでそろそろ来るはずだが・・・

ギイイイイイイ

ギルドの両開きになつていい木製の扉が、軋んだ音を立てて開いた。入つてくるのは鮮やかな赤髪が特徴的な20代前半と思われる女性、防具は頭からつま先まで砂漠に潜る砂竜の素材、《ガレオスシリーズ》で揃えられている。

その後ろにおどおどしたように身を縮めながら女性を追いかける、自分とそう年の変わらない青い髪を短く切つた青年、こちらは砂漠

や沼地に生息するゲネポスの『ゲネポスシリーズ』だ。

この青年にはあつたことがある、リオレウスの依頼を請けにきたのは「Jの青年だ。

「アイン、Jの人たちがそつよ」

私が言つとアインは緊張した表情を見せながらも立ち上がり挨拶する。

「ど、どつも。アイン・フレンツです。」

アインが挨拶をする、するといきなり赤髪の女性がアインの手を取りすごい勢いで上下にブンブン振る。

「キヤアアアア！ 可愛い男の子オオオオ！ やつたわ！ 天は私を見放さなかつたわ！」

・・・・・ハンターは曲者が多いがこれは予想外だ、なんとか予想以上だ。

「私はセレインね！ セレイン・クー！ Jつちは弟子のテリオだよー！」

女性 セレインさんがハイテンションで自分と連れの名前を紹介する。

「ジビ、ジつも、テ、テリオで、でです」

どもつてゐ、どもつてゐ。こんなやつでハンターが務まるのだろうか。

とりあえず一人の経歴を見てみることにする、月に一回だがギルド本部から地方ギルド（ここ）の様な所だ）に滞在しているハンターの履歴が送られてくる。

はぐれのハンターでない限りはギルドに登録してあるはずだしセレインさんとデリオ君が来たのは10日前だから履歴が手元にあるはずだ。

カウンターの奥の本棚を探つてみるとすぐに見つかった、デリオ君のページから見てみる。

（え～っと現在19歳・・・年上なんだ、出身地はココナ村、近くの村ね。

得意な物は・・・料理！？ 追記事項に「人と話すのが苦手です！？」

経歴を見る限りハンターなんかより定食屋を開いた方が良い人生をおくれそうである。

気を取り直してセレインさんの履歴を見る、こいつの方がよっぽど曲者なのが。

（・・・登録時の年齢：幼女、現在の年齢：お姉さま。好きな物は男の子、得意な事は何でも鑑定、追記事項：「おなか減った」・・・）

履歴は適当に書いても良い、これを見てギルドは依頼をまわすのでお代は自分の命となるからだ。

現に、この街でどう見ても30を超えた男が登録の時「23だ」といつて登録した事があつた。

そしてその男は体力に見合わない依頼をまわされ、この街に帰つてくることはなかつた。

(それにしても良くこんな事を書いた人をハンターにしたものね)

とりあえず、AINにはまずリオレウスよりも先に強敵がいるようだ、ある意味リオレウスよりも手ごわい強敵が。

「ふう〜・・・」

「なんに、ため息ついちゃってるのカナ?AIN君?」

「あなたのせいだよ!」

全力で怒鳴つてやつた、あの後セレインの手から逃れられたのは今
より1時間前。

いまや夕日をバックに馬車が走つてゐる。

馬車といつても前だけで俺たちが座つてゐるのはバザーで果物を入れてゐるようなワゴンを4倍くらいの大きさにした物だ、ギルドはケチれるところはどこまでも削る。

「お、お、落ち着いてAIN君、あ、あれは師匠のびよ、病氣だか
ら」

腹が立つぐらいどもるテリオ、だがセレインは慣れてゐるのか普通に言葉を返す。

「病氣つて何さーー、これぐらい普通でしょー、街に着いたら田に付いた男の子に挨拶したり、酒を飲ませて前後不覚になつたところ

で口説いたり、寝込みを・・・

「わー！ わー！ わー！」

これ以上は青少年の発育上良くない発言が出そうだったので全力でとめる。

道中、二人の関係を聞いてみた。

セレインは大陸からやつて来たハンターで（ここは島国だ）デリオの村に偶然立ち寄つたらしい。

まだドスランポスを倒した程度の素人だつたデリオはセレインの実力に感動し、弟子になつたということだ。

セレインのほうも「若い子なら全然OK！」にやはははは」とかいつて受けたそうだ。

そして今回、弟子の教育のためこの依頼を請けたので俺が来たのは「同レベルの相手との連携」と言つ觀点でとても都合がよかつたらしい。

でもそんな事はどうでも良い、今俺の心を占めているのは・・・

（飛竜の王者・・・リオレウス！ やつと戦えるんだ！ あいつを倒しておっさんを驚かしてやる！）

心にそう誓つのだった。

その3・主者に挑む仲間たち！（後書き）

本編に出なかつたので一応言つておきますとトリオのフルネームはデリオ・ヴィレオス、リーネのフルネームはリーネ・クレイオスです。

次はいよいよオレウス！気合入れて書きます！

その4・到達、そして物語への序曲（前書き）

今回からキャラ紹介もつけてみようかと思ひます（遅つ…）

アイン・フレンツ

使用武器・太刀

好きなもの・うまい飯、ハンターのおひさん（親のようひに慕つてい
る）、リーネ（友達として）

嫌いなもの・無い、何があるうとそれを全力で楽しもうとする。

追記事項・年上にもタメ口だがそれは「誰とでも仲良くしたい」と
いう気持ちの表れである。壮年のハンターに助けてもらつた日以来
何かに怯えたりしたことは一度も無く、どんな逆境だらうが楽しみ
として受け取れるある意味ハンターとして理想的な性格をしている。

その4：到達、そして物語への序曲

とりあえず《森丘》と呼ばれている狩場に着いた俺たちは支給品ボックスを探る。

支給品ボックスとはその名の「」とくギルドからの支給物が置いてある箱だ、ギルドとしてもハンターに簡単に死なれては困るのでこういう措置を取っている。

その中から携帯食料を取り出して食べようとする

「ちよ、ちよつと待つて。も、もつたいないから、か、わざわざここ

そう言つてテリオがこんがり焼けた肉を差し出してくる。
ベースキャンプ

ハンターとしてどうかと思うが。

(あ・・・うまい・・・)

呆れながら食べたのだが結構うまかつた、たぶん《採取》したのであろう香草や薬味の味がする、焼き加減も少し生が残るように、それでいてジューシーに。

この狩りが終わつた後も組みたいな、とちょっとだけ思つた。

「ほいほい、とつとと行くよー！ ガキどもー！」

少し離れたところからセレインの声がする、てかあの人何歳なんだ
うう、見た目20代前半だけどたまに言い回しがちょっと古いし・・

「ん？今なんか失礼な事考えて無かつた？」

「いえいえ、何も」

とりあえず思考放棄、これからリオレウスと戦いつつに俺は何いらない事を考えてるんだ。

俺たちはリオレウスがよく居るといつぽの方へ歩き出した。

丘の奥の方にたどり着くと、風を感じた。

あの時と同じ風、熱を持った激しい、熱い旋風。

風がもたらす結果は分かっている、意識せずに俺は口元を歪めた。

「よつやくやれるな・・・！リオレウス！」

俺の声に答えるようにそれは天空より姿を現した。

あの時と同じ紅い体、あの時と同じ大きな翼、あの時と同じ燃える
双眸。

違うのは傍らにいる仲間、それと俺自身だ。

「とつあえず意識」に向けるよー。」

セレインは叫ぶと背中に掛けてあつた武器 リオレウスの雌である
リオレイアの素材で出来た弓^{クイーンブレスター}を手にした。

空気を裂き飛んでいく矢、それは見事に命中しリオレウスがこちらに気付いた。

リオレウスの口が燃える 否、口内で高熱の火球を生み出しているのだ。

そしてそれは放たれた、弓を放つて着弾する火球、しかしそれはセレインに向かつて。

派手な音を立てて着弾する火球、しかしそれはセレインに届かなかつた。

デリオの武器である長槍ナイトスクワイアード ランスの対となつている盾で防がれたのだ。

「いやつはは、感謝するよお愛弟子！」

「しゅ、集中してくださいー！」

二人の会話中にも俺は駆ける、奴が降り立つ場所へ。

リオレウスが地に降りるまでおよそ80cm、十分届く距離だ。

リオレウスの下に潜り込み、巻き起こる風圧に耐え太刀で尾を斬りつける。

ギャオオオオオ

苦悶の叫びを上げ、リオレウスが地に落ちた。

それを待つていたとばかりにデリオが槍を正面に構え、こちらに向かつて走つてくる。

あれがランスの最強の攻撃手段、突進だ。

槍の先端がリオレウスの顔に当たり、そしてあこを貫く。

そのまま勢いを落とさず喉を搔かき、腹を突き、尾を裂く。

リオレウスは予想外の攻撃に驚いたようで、さらに体勢を崩し倒れこむ。

俺が頭を、デリオが体を、セレインが翼をそれぞれ全力で一斉に攻撃する。

「ウオオオオ！」「だあああ！」「あつたれー！」

だが、それでも火竜の王は立ち上がる。

「クツ！さすがに今まで見たいには行かないか

「氣いつけなさい、AIN！あいつキレてるわよ！」

見るとリオレウスは頭の角がぼろぼろになり翼にあつた翼爪よくそうも割れているが、その眼はさらに輝きを増して口からは地獄の業火のような炎が見え隠れしている。

ゲリヨスほど顕著ではないがモンスターは身の危険に晒されると防衛本能により普段使っていない分の筋肉やその他の器官まで使うようになる、それをハンターの間では怒る、キレるといつてているのだ。

ギャアア オオオオオ！

先程よりも一層大きく、凶暴な咆哮ぼうごうを上げるリオレウス、俺はまったく体が動かなくなつた。

あの日のように恐れで体が動かないのではない。心の奥底、恐怖から逃れようとする危機回避本能が皮肉にもその身を危機に陥れさせているのだ。

「ち、くしょ・・・！」

「「AIN！」」

二人が同時に叫ぶと『リオはリオレウスの前へ、セレインはその場で素早く弓を射つた。

セレインの放った矢は俺の頬に当たり、痛みのショックで体が動くようになる。

それだけでは間に合わなかつただろうがリオレウスはデリオが止めてくれている。

そのまま横に飛びながら会話を交わす。

「「Jめん、デリオ！」

「い、いこよ。それよりも早くた、体勢を立て直して！」

こんなときでもどもるデリオを見て、少し落ち着いた。

「少し時間を稼いでくれ！」

俺が告げるどデリオは顎きを返し、セレインは手でOKのサインを出した。

二人の連携は見事だつた、デリオは重厚で安定した重心を持つランスだからこそ出来る回避方法 ステップでリオレウスの攻撃を紙一重でかわし、攻撃が集中しそぎる前にセレインが矢でリオレウスを挑発する、単純な事に繰り返しだが同じ心で二つの体を操っているわけでもないので実際やるとなかなか難しい。

その二人の頑張りに報いるためにも俺は集中する。

（心を研ぎ澄ませ・・・全身に力が行き渡る感じ・・・何者をも恐れぬイメージを・・・）

それぞれの武器を専門にするハンターはその武器の極意を身を持つて知らなければならない。太刀の心は東国のサムライといつ剣士に通ずる、斬ることに集中する意志、その極意のイメージを練氣れんきと呼ぶ。

体中に力がみなぎる、自分が何か違う強大なものになつた感覚、太刀を通して今の自分は最強だと言い聞かす事で本当に強くなれるの

が太刀使いだ。

戦場を見る、先程から弱つたまま戦っていたリオレウスがついにふらつきながら飛び立とつとしている。

「逃がすかア！」

そう言って、俺は走る。初撃の時はまったく違つ、風のよつた速さでリオレウスの元へ。

体中に溜めた練気を刀とそれを持つ手に集中させるイメージ、体が型を覚えるほどに練習したその技を放つ。

「食らええええ！」

氣刃斬り おっさんに必死で頼み込んで教えてもらつた俺の最強の技。

一度、下段から頭の上へ回すように振るいその勢いを利用して袈裟懸けに切る、単純といえば単純だが練気と混じる事により効果的な技へと昇華する。

さすがのリオレウスも弱つた体に氣刃斬りは耐え切れるはずがない、俺の太刀で胸を裂かれ落ちた体勢のままで死んでいた。

「はあ・・はあ・・・・やつた・・・・やつと・・・・勝つたああ
ああ！」

デリオはおれと同じように地面に倒れこみ笑つていて、セレインはいつも通りお気楽に「にやはは」と笑いながらリオレウスの傍で手招きしている。

俺は微笑みながら立ち上がり、剥ぎ取りナイフを片手に素材を手に入れようとリオレウスのほうへと歩み寄つた・・・。

これでアインは自分の理想のハンター像に追いつけたわけである。しかし彼はまだ知らない、自分がどのような道を歩むのか。ここから、アインの物語^{ストーリー}が始まる。

その4・到達、そして物語への序曲（後書き）

題名の意味（と題つかなんと書つか）が出来てとりあえず満足です。ここからゲームのモンスターハンターと違つよくなつていきますが、容赦を。

その5・見送り、決意、始まり（前書き）

たぶん始めての一日に連続2話投稿です（笑）
とりあえずキャラ紹介

リーネ・クレイオス

使用武器：片手剣（護身用に少しだけ使える）

好きなもの：静かなお客、アイン（友達としても異性としても）
嫌いなもの：リオレウス（1話の時以来トラウマになっている）、
無意味に騒がしいお客

追記事項：実は普通に戦闘ができる戦う受付嬢。リオレウスに襲わ
れた時に一步も動けなかつた事で「自分は狩りで役に立てない」と
思つており、受付嬢になる事を選んだ（アインも動けなかつたので
「自分はリーネを守りきれない」と思つており受付嬢になる事を勧
めた）

その5・見送り、決意、始まり

「これはアインたちの狩りの後、町へと戻る馬車での出来事。

「ねえ、アイン？私達といつしょに来る気は無い？」

「デリオが焼いた狩場で釣った魚を食べながら、セレインはアインに向かつて唐突に言う。

「いつしょに・・・って、どうにいふこと？」

「ほ、僕たちは、大陸に、い、行こうと、思つてゐるんだ」

「デリオがどもりながら補足する。

「大陸に行けば」こじや見られないモンスターもいつぱいいるし武器とかの技術もすごいわよ！デリオだけを鍛えるつもりだったんだけど君の事も気に入つたからさあ・・・」

「周りに同年代のハンターなんか居ないので気にしていなかつたアインだが、実は気刃斬りとは太刀の最高位の技で、そんな簡単に使えるものではない。

「でもまだ『初の型』だけしか覚えてないし・・・」

「氣刃斬りには『初の型』『次の型』『終の型』を連續で繰り出す一連の流れのまとめた呼び方でアインはまだ『初の型』しか習つてい

ないのだ。

「それでもその歳でそこまで出来たら上出来よン。まあ、私たちはあさって明後日に旅立つから考えておいて。」

そこで一回の話は終わり、狩りでの出来事や馬鹿話なんかをしながら馬車に揺られた。

しかしアインの頭から先程の話が離れる事はなかった。

* * * * *

夜になり、やがてアインたちはギルドへ到着した。

「アイン！ リオレウスを倒したのね！」

いきなりリーネがアインに飛びつく、というか抱きつく。

「う、うわあ、おおい！離れろー！」

一
心配したじやない、心配したんだよ！もうちよりと早く帰ってきて

「泣くな、泣くな！何か俺が悪いみたいだろー！で、こいつも同じくじらいの時間だろー！」

相手は別だが出発の時と同じ状況になつたアインであつた。

とつあえず落ち着いたリーネとアインは一人つきりで話しをしている。

セレインとテリオが帰るとき、ギルドで飲んでいたハンターたちを「気を利かせて上げなさい、にやはは」とか言いながら連れ出したので一人だけになつたのだ。

「アイン、あの・・・」

「俺さ」

リーネの台詞を遮り、アインが話す。

「大陸に行こうかと思つてゐる」

「・・・！」

リーネが息を呑んだことがアインにも分かつた、だが続ける。

「セレインが誘つてくれたんだ。俺、やっぱりこの仕事好きだからさ、もっと強いやつを狩つて見たい、もっと強い武器を持つてみたつて・・・思つちゃうんだよな」

「・・・！」

「お前に相談しなかつたのは悪いと思ってる、でももう決めたんだ。・・・向こうに着いたら手紙でも書くよ」

その言葉を最後まで聞かず、リーネは自己になつてゐるギルドの2階に上がり自分の部屋に閉じこもつた。

「リーネ……」

彼女が泣いていた事に、彼は気付かなかつた。

そうしてアインは家路に着いた、親にもこの事を話さなければならぬ。

しかしそこで意外な人物に出会つた。

「……！ おっさん！」

そこにいた人物はあの壮年のハンターだつた。

「……なるほど、おめえも偉くなつたもんだな」

既に頭髪のほとんどが白くなつた元・ハンターはアインの話を聞いて何度も頷いた。

「男ならだけえことをしてえのは当たり前つてモンよ！ 最後まで自分で教えられなかつたのは残念だが……『次の型』の奥義書だ、これ見てしつかり勉強しな」

アインに手渡されたのは一枚の古い紙、しかしそこには、確かに長年受け継がれてきた技術が記してあつた。

「ありがとうおっさん。……とにかく『終の型』は？」

「あれは秘術だからな、どつかに記しちゃいけねえのは暗黙の了解

みたいなもんよ。どうじても覚えたいたんだつたり向ひつで師匠でも探しな」

「・・・分かったよ、最後までありがとうございました、おっさん!」

そう言って師匠と弟子は別れた、未来のために。

次の日の朝。

「あなたがハンターになった時から・・・の人と同じ場所に行くことすら覚悟していました。今更私は口を挟むつもりはありません。」

「アインが髪を結い上げた妙齢の女性 自分の母に向かつて旅に出る旨を伝えた後の母の第一声がそれだった。」

アインには既に父はいない、流行り病だつたらしい。だからこそそこまで老ハンターに懐いた訳だが。

「かあさん・・・ごめん」

「そう思うんなら」

後ろから声がする、壁にもたれかかって話を聞いていたのはアインの弟だ。

「だからハンターになんかなるなよ、死ぬ確率が高い事を知らなかつたほど馬鹿じやないだろ、兄さんも」

「アインがハンターになる時、一番反対したのは弟だった。

「これ以上母さんを悲しませる気か！」とすじい剣幕で怒り、殴り合いで喧嘩をやえした。

「この仕事も本当なり兄さんがやるはずの物だった」

（やうだ、ハンターになると我が仮を言ひ、一つ下の弟に働かせているのは自分だ）

今更だがアインは悔やむ、生活費を入れているからといって世間的に許される事ではない。

「すまな・・・」

「でもね、僕はこの仕事を結構気に入ってるんだよ」

アインの言葉を遮り、弟は長い棒のよつなものを投げてきた、アインは反射的にそれを受け取る。

「興味があったから作ってみただけだ、いらなしから処分しておいてくれよ」

それは火竜リオレウスの素材で作られた太刀、《飛竜刀【紅葉】》だ、家にリオレウスの素材の余りは無かつたからアインが狩つたリオレウスの素材で作ったのだろう。

よく見れば目にクマがあることに気付くはずだ、彼は徹夜で仕上げたのだから。

「・・・ありがと」

「こらないだけだ、『ハリ』出す手間が省けた」

弟自身は仏頂面だったがその太刀には確かに「頑張れ」という意思が籠められていた。

様々な人の意思に見送られ、アインが旅立つその日の朝。

「う、うう……」

リーネはまだ引き籠もつたまま、泣いていた。

（せめて最後に見送りたいのに、どうして泣いてるのよ！？「こんなんじや会いにいけないじやない！」）

ベッドに突っ伏していると、いきなりドアが開いた。

「まだ泣いてるの？」

母親だった、いつも優しい人で、受付嬢の先輩でもある人。でも今はその姿を見ても腹が立つだけだった。

「出でつてよ……！」

「あらあ、これ見ても言つかしらね？」

興味を引かれて顔を上げる、みつともないぐらい、涙でぐしゃぐしゃになつた顔だが、身内になら見せても対して抵抗はない。

「何、それ？」

「大陸のギルドへの推薦状よ、行きたいんでしょ？ アイン君といつしょに」

一瞬の思考停止、だつてそれって・・・

「アインといつしょに・・・大陸に行けるの？」

「アイン君があんたのとこのギルドを使えば、だけどね」

胸を張る母親に「お母さん大好き～」と抱きつきにいつたら「現金な子ね」と言われてひらりとかわされた。とりあえず・・・そうと決まれば準備だ。

「待つて～！私もいく～！乗せて～！」

腰に護身用の片手剣ハンターカーリングを吊り下げる私が来たとき、アインは一瞬驚いた表情になつた。

しかしそれもすぐ笑顔になり、こいつ言ってくれるのだ。

「ああ。一緒にいこう！」

彼の物語は動き始めた、いや彼だけではない。彼と彼女とその他たくさんこれから出会っていく者たちの物語

は今、
始まつたのだ
・・・。

その5・見送り、決意、始まり（後書き）

まずモンハン知らない人に補足致しますと氣刃斬りの『型』は実際のモンハンにはありません、自作です。

あと今回は新キャラが大量に出ましたがおそらく全員再登場する事はないでしょう（笑）

ここから本格的に書きたかつた事が始まります、長かつた・・・・。他にも書いてる途中の話があるのでここからの更新はそつち優先になるかもしれません。

では見続けてくださっている方々にたくさんのお感謝を！

その6・新たなる地への船旅（前書き）

セレイン・クー

使用武器：弓（実は何でも使えるがパーティ構成を考えて今は弓を使っている）

好きなもの：かつこいい（またはかわいい）男性、お菓子
嫌いなもの：しつこい性格の人（男でも女でも）、分からぬ事

追記事項：始めはパーティの知恵袋のようなキャラにしたかったんですが書いてるうちに変人に・・・
大陸のハンターという以外は謎な女性です。たぶんいつか謎が解けます・・・たぶん・・・
年齢について訊ねるのはタブーでしつこく聞いた人間は次の日、謎の失踪を遂げます（笑）

「彼」は待っていた、この暗い場所で。暗からうが明るからうが「彼」には光を感じることが出来ないので別に良いのだが、体中に巻きついた拘束具は不快だった。「彼」を逃がさないためだろう。

敗北し氣を失つた時は死を覚悟した。

しかし次に目を開けるとどうだらう、「彼」の状態は死よりはるかに屈辱的で、どうなるとも知れぬ恐怖が付き纏う状況だつた。

「彼」は誇り高き者だつた、今まで何百もの人間を屠り、何千もの肉を食み生きてきた存在だ。

だから「彼」は最後まで待つのだ、己が有利になる状況を。「彼」が完全に敗北するなど、あつてはならない事だつたから。

* * * * *

「ううん、快適！」

俺の隣でリーネが言つ、ここは船の上だ。

「しかしセレインもさすがだよな、俺も無料でここまで快適な船旅が出来るとは思つてなかつたよ」

あの後、しばらく旅を続けた俺たちは海際までたどり着いた。

しかし大陸までの定期船は船賃が高く、セレインとデリオだけならまだしも4人が乗れる金は無かつた。

そこでセレインが提案したのだ、「モンスターを輸送する船に護衛として乗り込もう」と。

世の中にはモンスターをペットにしたり、食材にしたり、討伐だけでなく新鮮さを要求する人間がいる。

その時、ギルドは「捕獲」の依頼を出し、ハンターにモンスターを眠らせてそれを依頼主の所まで運ぶのだ。

その依頼が大陸側から来たものなら船で運ぶ、その時に船員の安全と安心のためにハンターが「護衛」の依頼を請ける事があるので。

確かにそれならばむしろお金を払われる立場になるのだが、腕が立つハンターしか請けられないで無理だと思った。

しかしセレインがその町のギルドに依頼を請けにいくとすんなり仕事をもらえたのだった。

「セレインさんって何者なんだろうね、ギルドの人は何か頭下げまくつてたし」

後半はくすくす笑いながらリーネが言つ。

「只者じゃない事は今までの狩りで散々思い知らせられたけどな、つとお~い! デリオ~!」

甲板の上でうろついているデリオを見つけて手を振る。

彼は少し鈍い動作でこちらに向かってくる、その様子を見てリーネ

がまたくすりと笑つた。

彼はここまで来る途中の冒険で得た素材と金を使って《ハイメタS》シリーズに鎧を変えていた、しかしその鎧は重くて大きいので「テリオが太つたように見えてなんだかおかしい。

「や、そこにいいたんだ」

相変わらず「テリオのどもりは健在である。

「今は狩りの時間じゃないんだから鎧を脱げば良いじゃない、『テリオ君』

「そそ、そんなわけにはい、いかないよ、リ、リーネちゃん。こ、これもし仕事なんだ」

確かに「護衛」の依頼だが本当にモンスターが逃げ出す事など稀だ、そこまで警戒しなくても良いと思つ。

「や、そういう君たちも、ちや、ちやんと着てるじゃないか」

「俺たちは軽いからだよ、『テリオのは見てるだけで体が重くなりそりじやん』

ちなみに俺も鎧を強化しており、念願の火竜鎧、《レウス》シリーズで全身を固めている、今は《飛竜刀【紅葉】》を使つてるので全身レウス素材である。

リーネも一応ハンターが使う鎧らしいのだがどう見てもいつもの愛付嬢の服を黒くしたようにしか見えない、《メイド》シリーズといふらしき。

母親にもらつたそつたが、セレインが見ると「うつひやーーそれレアモンじゃん！」とか言つていたのでそれなりに強いのだろう。

最後にセレインさんの鎧を紹介するがこれは岩壘とまで呼ばれる硬い甲殻を持った飛竜、バサルモスの素材で出来た《バサル》シリーズである。

ある日、街に滞在しているところなり荷物が送られてきて中身がこれだつた。

彼女曰く「みんな強くなつてゐし合わせよつて想つて家から送つてもうつた」だそつだ、やはり底が知れない。

「その通りー見つると暑つ苦しいから脱ぎなさーーイヤははーー

その台詞の聞こえた方を見ると予想通りの人影があつた、しかし場所は予想外だつた。

「セ、セレインー? ビビしてマストなんかにー?」

「なんとなくー

一応予想通りの答え、彼女の性格はこのたびで大体分かつていた。とんでもない事でもニコニコ笑いながら意味もなくやつてのけるのだ、良い事でも悪い事でも。

「あー何か潮が乱れてるー氣をつけなさいー」

「どうして」と聞く間もなく衝撃はやつてきた。

揺れる揺れる揺れる、船が大きく揺れています。

船に乗つたのは初めてなのでもちろんこつこつ状況は初めてだつた。

「うひやあー？」

あまりの揺れにリーネが倒れ込みそうになるが俺が支える。
しかし

「うおっ！ヤバイ、倒れる！」

「あー、もう！せっかく助けてくれたのにかつこ悪いー！」

そのまま倒れそうになる俺をさらにデリオが支える。
さすが長槍使いは重心の置き方を心得ているので倒れる心配はなさ
そうだった。

「じこは大丈夫・・・でも積荷の方は・・・」

上からセレインの声が聞こえた。
その時、その声の逆方向 真下から大きく歪な叫びが聞こえた気が
した。

「彼」は歓喜に打ち震えていた。
自らを縛る拘束具が先程起きた衝撃で外れたのである。
さらにもう一つ檻があるのだが「彼」の力を持つてすれば破壊は容
易い。

死を覚悟した自分がまだ生きられる事の喜びに、この恐怖から逃れ
る事のできる歓びに「彼」は吼えた。

「彼」は知らない、じこが海の上だといつこと自分の真上にハン
ターがいることも。

しかし知っていたとしても「彼」は同じ」とをしただらう、それ以外に生きる道はないのだから。

檻を突き破り、「彼」は甲板に現れた。

その6・新たなる地への船旅（後書き）

「護衛」の依頼はオリジナルです、実際のモンハンにはありません、たぶん・・・・

最新のフロンティアをやつていないので新しいシステムなどがあるても分からないのでオリジナルのつもりでそうでない事もあるでしょうが、「ご」ア承ぐださい。

その7・白き稻妻（前書き）

デリオ・ヴィレオス

使用武器・ランス

好きなもの：料理を作ること、子供
嫌いなもの：長く話すこと

追記事項：故郷の村の財政が厳しく、それを補つためにハンターになつた村長の息子。
いつか一流のハンターになつて一人で村を担える位になるのが夢。

その7・白き稻妻

「こいつは……なんだ！？」

真下から甲板をぶち破り現れた「それ」は今まで見た事が無い、異様な外見をしていた。

白い体、鋭い牙、翼に尻尾、ここまで飛竜だといえる形をしている。

しかしそいつには目が無い、そして丸みを帯びた頭の先に付いた口だけが赤く不気味だ。

「それ！フルフル！」

マストの上からセレインが叫ぶ、フルフルという飛竜は聞いたことがある。
だが

「こんなにでかいやつなのかよ！？」

いくらなんでも異常ともいえる大きさだ、この前討伐したりオレスの1・5倍ほど大きい。

「こんなに大きいのは私も見たことないよ！いくらなんでも大きすぎる！」

「せせつかく揺れが収まったのに、こ、こいつに、船が、しおめられたら……！」

「やつなる前に！倒す！」

俺は背中の太刀を抜き突つ込む。

だがそれを察したのかフルフルは「こちらを向き、姿勢を低くして尻尾を地面につける。

フルフルの口の中で稻妻が爆ぜる。

「あ、危ないっ！」

デリオが俺の鎧の襟を掴み引き寄せる、次の瞬間フルフルの口内の稻妻は三方向に広がつて地面を這う。

その軌道にはさつきまで俺が立つていた所も含まれていた。

「ありがとう、助かった！」

「そそんな事より……」「こんなのが当たつたら……」

先ほどの稻妻 電気プレスの進行方向を見ると、酒の入った樽が中身ごと蒸発していた。

「デリオは後ろに回りこんでくれ！セレインはそこから援護を！」

「わ、わかった」「ここに居たのも無駄じゃなかつたわね、ニヤハハ

ハ

作戦を伝え俺は正面から突つ込む、攪乱^{かくらん}が目的だ。

電気プレスは確かに強力だが放つ前の予備動作が大きいようだ、十分にかわせる。

上からセレインの矢が飛ぶ。

弓は《クイーンブラスター》のままだが矢の先に薬品をつけている、弓使いの戦闘法の一つで今は相手の体に毒を流し込む《毒ビン》を

使っている。

デリオは前に使っていた《ナイトスクワイード》を強化した《ランパート》と言う砦の形をした盾が印象的な槍で腹を突く。

俺もフルフルまでたどり着いたが、その時には既に尻尾をつけて頭を下げていた。

「クッ！」

俺は横の方へ飛ぶ、電気ブレスをかわせるかどうか微妙なところだ。

「うわああ！」

だが予想していた電気ブレスは来ず、予想していなかつたデリオの悲鳴が聞こえる。

フルフルを見ると全身に電気を纏っていた、体内で発電した電気を体の外に漏れるほどの電力で放つ技 体内発電だ。フルフルの技で一番威力が高いと聞いたことがある。

デリオはそのまま倒れた、感電と痛みで体が動かないようだ。

「デリオ！」

叫んで安否を確認する、うまく喋れないようだが唇が動いていたので氣を失ってはいな様だ。

助けなければ思い、走り出そうと立ち上がる。

「アイン君！駄目っ！」

セレインの声を聞き、フルフルの方を見る。
どこまでが首でどこからが頭か分からないが、首（または頭）を伸ばし口を天に掲げる様に上に向けている。

そして聞こえる、
歪な咆哮。

いわゆるやうに、怖いなど普通の飛竜の咆哮に対して抱く印象を超越して
いる。

手で塞いでいるのに耳が痛い、鼓膜が破れてしまいそうだ。
上を見るとセレインも耳を塞いで動けないようだ。

フルフルは吼え終わると再び体内発電の姿勢に移る、もちろんデリオナミックなつづり。

まだ耳が、その奥の脳が痛くて動けない。

（間に、あわない・・・！）

フルフルが姿勢を低く、これが終わればデリオは・・・・・！

その時、目の前を黒い影が横切った。

リーネた
と思ふた時には既に彼女は「川」ノ川の体の下に潜り込ん
でいた。

「あああああああ！」

しかしリーネは逃げ切れず、デリオの代わりに体内発電をうけてし

また。

その7・白き稻妻（後書き）

すいません、最近忙しくあまり書けていないので途中で切って投稿いたしました。

その8・稻妻散つて一人旅（前書き）

時間を置いたので文体が変わってしまっているかもしれません・・・

その8・稻妻散つて一人旅

怖かった。どうしようもなく怖かった。

旅をしている時も普通のモンスターならともかく飛竜の相手だけは出来なかつた。

あの時、幼くしてリオレウスの恐ろしさを目の当たりにした私は、飛竜の前だと条件反射のように体が動かなくなる。

今回もそのせいで戦列から離れていた事が幸いし、私は吼え声に耐えられる位置にいた。

それでも、それでなくとも体は動かないはずなのに仲間が危ないとと思うと勝手に体が動いていた。その後はほとんど覚えていない、けど

大好きな人の、叫ぶ声が聞こえた気がした。

「リーネツ！」

叫び、駆け出す俺。

まだうまく音が聞こえない、だがそんな事はどうでも良い。今動かなくて、何時動く、頭の中はその思いで一杯だつた。

「あいつ・・・また！」

セレインが呻くように言つ、フルフルは三度体内発電の姿勢に入つた。

セレインも矢を放つてはいるが止まらない、俺もまだ間に合わない。

だが、その時

「うあああおおおおおお！」

「デリオがほとんど氣合だけで体を支え、立ち上がった。そのまま、さきほどリー・ネがしたように（人物は逆だが）突き飛ばし割つて入る形になる。」

「デリオ！」

「このままじゃ同じことの繰り返しになる、そう思った。」

「うあああああ！」

だが、デリオはその予想を見事に裏切り、悲鳴を上げながらもランスの大盾で電撃を防ぐ。

（槍は手放していても盾は手放していないのが、どうにもデリオらしいよな・・・・・）

思つてから気付く、状況が変わった事で苦笑する余裕が出てきたようだ。

そう、デリオもリーネも助かった、ここからは反撃の時間。

「おおおおおおお！」

今度こそ、俺は斬りかかる。

そして切り口より発火、もがいてもなお消えぬ炎はフルフルをさらりと苦しめる。

これが【火竜刀・紅葉】がリオレウスの素材を使つてゐる理由だ、

火竜の発火器官とそれに耐えうる甲殻が成せる「火属性」の攻撃がこの太刀最大のウリだ。

しかしフルフルも黙つて斬られるわけではなく、反撃を試みた。その不気味な顔のついた首を伸ばして噛み付いてくる。

だがその程度の反撃は予想通りだ。

あえて言うなら吼える時に首を伸ばしたのが命取り、ハンターとは状況と情報から推論し学習する生き物なのだとモンスターには分からぬいらしい。

「「」、「めん、僕、槍、落とした、から……」

「ああ、後ろでリーネを頼む！」

回避しながらデリオと会話する、情報を伝え合い多数で戦闘できる事もハンターとしての強みだ。

デリオがさがる時間を確保するために俺は太刀を振るい続ける。

「はああああ！」

自分に気を引きつける事を第一に考えて頭部を執拗に狙い続けた。だがそれだけに気を取られすぎたようだ、いきなり回転したフルフルに対応しきれず、尻尾によつて俺は吹き飛ばされた。

「ぐつ・・・・ちくしょつ！」

いまさら大したダメージでも無いしすぐに体勢を立て直した、問題は距離が離れた事だ。

フルフルがリーネに飛びかかるうとする。

本日何度も知れないピンチ、だがフルフルの思惑はセレインにとって打ち崩された。

威嚇射撃というやつだ、フルフルの鼻先をかすめるように矢を放ちそれによりフルフルが怯む。

(ナイス、セレイン!)

心の中でセレインに感謝しながら俺は走る、既に体中は練氣で満たされている。

「食らえええええええ！」

雄叫びと共に太刀を奴の口の中に刺し込む。そして力任せに上に引き裂くとフルフルの口の上部分は縦に裂けた。さらに練氣を解き放ち、鬼刃斬りを繰り出す。袈裟懸けに斬りかかる、口は斜めにも切れて歪な×マークのようだ。さらに『次の型』に繋ぎ、型にあるとおり踏み込みながら下げた太刀を跳ね上げる。

フルフルは喉元を裂かれ歪な悲鳴を微かに上げるが、そんな事は気にせず最後に繋ぐ。

「これで、とどめだつ！」

さらに踏み込んで大きく斜めに薙いだ太刀はフルフルの腹を断ち、命を絶つた。

最後にもう一度踏み込んだ俺の後ろで、フルフルが横に倒れた。

* * * * *

「本当にすいませんニヤ、ハンターさんにお手数かけさせてしまつ

た上にこんな事に・・・

陸地に降り立つた俺たちに一足歩行の猫 アイルーが話しかけてきた、あの船を動かしていたのはこいつ等らしい。

あの後、フルフルを倒したのだがそれでも船は転覆しそうになり、近くの海岸に着岸することになった。

その時、アイルーが伝書バトで町へ連絡して馬車を送つてもらつたのだがこの人数だと一人ほど乗れなくなるらしい。

戦えない船員をこんな所に残す事は出来ないので相談した結果、まだ意識の戻つていらないリー・ネとこの中で一番強いセレインが馬車に乗る事になった。

馬車に乗るとはいへ危険は多いのだから護衛は強い方がいいし、もしリーネが電撃により体に何らかの障害が残つていたら（考えたくないが）旅をする足手まといになる。

「本当にすいませんニヤ・・・・・・

「別に大丈夫だって」

この世の終わりを自分が引き起こしたと言つぐらう申し訳なさそうな顔をするアイルーに向かつて、俺は苦笑した。

「せめて地図と食料ですニヤ・・・・・もつていつてほしいですニヤ

「あ、ありがとうございます」

デリオがそれらを受け取り、俺の横まで来る。

「じゃあまた街でな、セレイン・リー・ネを頼んだぞ！」

「まつかせなさいー・グラビモスがきたつて追い返してやるわよー！」

ちなみにグラビモスというのは火山に生息する最大級の飛竜でほとんどのハンターが避けて通りたがるような存在だ。

まあ、それよりも本当に一人で追い払えそうなセレインの方が怖いわけだが。

船上での狩り、一人旅、波乱だらけの始まりだ。

だがこれは本当に「始まり」に過ぎないので・・・・・

その8・稻妻散つて一人旅（後書き）

私生活の問題でなかなか書けません・・・・もう一つの小説に至ってはほぼ放置状態・・・・。

こんな状況ですが皆様の暇潰しにでもなれば幸いです。

その9・幼き射手（前書き）

ものすごく久しぶりの更新です。
見ててくれている方、申し訳ありませんでした。

一応受験生なものでしばらく執筆を控えておりましたが一段落した
ので戻つてまいりました。

これからも更新速度が落ちるかもしれませんのが是非よければ最後まで
お付き合いください。

その9・幼き射手

俺は走る、隣に居るデリオも走る。

俺たちは逃げているのだ、いや正確には誘^{あひ}き出している。

俺の武器は太刀でデリオの武器はランス、どちらも入り組んだ場所で振るうには適さない武器だ。

だから向こうから出てきてもらつ、枝の多い密林地帯ではなく好きな様に戦える丘の方へ。

「わあ、出てこよーやつたにならへりでも相手になつてやるー。」

丘にたどり着いた俺が叫びをあげたとき、後ろから衝撃が来た。やつが空から落ちてきた 飛び上がってきたのである。

桃色の体に太い四肢、長い尻尾は物を巻きつける事に長けていて、現に今も尻尾に光る鉱石が見える。

全体的にファンシーな感じだが目つきは鋭く、全身の雰囲気が台無しだ、だがそれこそ彼が野生のモンスターだという証。彼の名は、ババコンガ。

ブオオオオオオオ

これは雄叫びではない、屁である。

「デリオ！　^{じゅうこよだま}消臭玉は用意してゐよな？」

「う、うん」

「消臭玉」とは奴の屁の臭いが体にまとわりついた時、臭いを落と

すために使う。

そんなことは後でいいとハンターではない人は思うかもしれないが、あの屁の臭いは臭すぎて飲み薬などが喉を通らなくなるのだ。

グオオオオオオオオ！

アイテムの確認をしていると、今度こそ本当の雄叫びを上げながらババコンガが突進してくる。

体の大きさは飛竜に劣るがその筋力はなかなか侮れない、当たると鎧を着いても危ないだろう。

俺はババコンガの突進経路に斜めになるように立つ。タイミングを見計らい、そして後ろへ飛び退く。その後ろに下がる力を利用して、横薙ぎに鼻つ柱を斬りつけてやつた。

グオオオウ！

驚きと痛みにババコンガの突進は止まる、そしてそれは絶好の隙となつた。

後ろに控えていたデリオがそのまま頭を突く。頭蓋を貫通とまではいかなかつたが、頭にある毛が散つた。

「や、やつた！」

「いや・・・跳べ！ デリオ！」

俺の言葉に従い、デリオが飛び退く。

その瞬間、ババコンガは屁を放つた、デリオがさつきまで居た位置も範囲内だ。

「こいつ・・・キレたか」

ババコンガの顔は真っ赤になつてゐる、本当に怒つてゐることが分かりやすいモンスターだ。

そしてそのまま、さつきよりも機敏な動きでババコンガは飛び上がる。

そしてそのまま、落下。

「ちつー！」

俺は地面に飛び込むようにして避ける。

後ろを見ると、奴が落ちた地面は陥没していた。

軽く恐怖を感じながらも俺は奴へ斬りかかる、この瞬間は隙が大きいからだ。

「だ、駄目だ！」

デリオの言葉を聞いたときにはもう遅い、隙があると過信してキレた時のスピードを見誤つてしまつた。

眼前に奴の顔、自分の顔は来たる衝撃を思い歪んでいたが、身を捻つた、太刀をかざした、防げるかどうかは運次第・・・・・・。いけるか？

ババコンガの腕が振り下ろされる、その瞬間・・・・・・

ターン

火薬の臭いと風を切る音が遠くから流れてくる。

前を見るとババコンガは俺から興味を失つたように後ろを向いている。

訳が分からず「デリオの方を見ると、近くにある洞窟の方を指差していた。奥の方は暗くて見えないが銃身があるのが分かる、さっきの音はこれか。

ターン、ターン

繰り返し弾が放たれる。

しかしあまり効いていない様で、ババコンガは業を煮やしたように洞窟へと走る。

「お、オイ！ 危ないぞ！」

顔も知らない相手に忠告をする、が

ターン
「大丈夫」

銃声と共に次は声が返ってきた、まだ若い女の声だ。
何が大丈夫だ、そう叫ぼうとしてババコンガの動きが止まっている事に気付いた。

「す、睡眠弾……？ で、でも即効性が……？」

「いや、麻醉弾だ。知らないか？」

デリオの疑問に答えたのはさっきの声だ。

俺達の大陸には、捕獲依頼の時にギルドから支給される手投げの「
麻醉玉」があるが

弾丸まで作られているなどとは知らなかつた。

「とりあえず依頼達成、後はギルドがやつてくれる」

洞窟から現れたのはまだ年若い少女だった。
小さな体に不似合いな大型砲（ヘビイボウガン）を携えている、マカライト鉱石の機構をバサルモスの甲殻で覆つた『ロックイーター』というヘビイボウガンだ。

「えつと……どういふことなんだ？」

本当に訳がわからないので質問する、俺は『テリオ』一人だけで依頼を請けたはずだ。

「詳しい話は村で……、帰りましょう

少女の言葉に従つて俺達は狩場を後にした：

* * * * *

海岸で一人と別れたあと、俺と『テリオ』は街へ向かつて旅を続けていた。

しかし、メラルーに食料を渡されていたとはいえ路銀は簡単に尽きてしまい結果、立ち寄つた村のギルドでババコンガの討伐依頼を請けたのだが……。

「で、説明してもらおつか」

いきなり田の前の少女が現れたのである。

ここはギルドだ、俺達は軽食を取りながら話を聞いている。

「そのつもり、私の名前はメルトラ。仲間とはぐれたの

「狩場でか？」

「ううん、村でなんだけど……」

そこでミルクを口に含むメルトラ、俺達も一旦食事を再開する。

「オジサマは優秀なハンターで、頭も良くて、とても良い人なんだけど……」

「正義の味方」体質なの……

オジサマと言づのははぐれた仲間の事だらう、それよりも氣になつた言葉がある。

「正義の味方体質ってなんだ？」

「困つた人や大変な事を見ると絶対に手助けするの、後先考えず、周りを気にせず」

今まで無表情だつたメルトラが少し恥ずかしそうに顔を伏せた。

「…………急ぎの依頼があつてお前のことを忘れて行つてしまつた、とか？」

半分冗談だつたのだがメルトラは顔を伏せたまま頷く、どうやらビン「ううし」。

「でもそれならどうしてあんな所に居たんだ？依頼の重複なんてギルドはやらないし……」

「それはね、実力を見せておきたかったの」

「え？」

「この先の街まで行く事は知ってる、そこまで送つて欲しいの」

その9・幼き射手（後書き）

長い間ともに書いていなかつたので文体が変わっているかもしけません・・・・なんだかこんなことをよく言つてますね・・・

更新を待つていてくださつた方、ありがとうございます。

その10・そしてヤマハ銀世界だった（前書き）

受験生なら勉強優先なんてお決まりをぶち破つて投稿です。
ちやんと勉強もしてるんですよ、あはははは・・・・・

メルトラはまだ明かせない事があるので紹介はまた今度です。

その10・そしてそこは銀世界だった

メルトラが「送つて欲しい」と言つたのはつまり、俺達とパーティを組みたいという意味だった。

「私、射撃担当だから一人だとあまり上手く戦えない、それに・・・」

「それに?」

「この先の道が土砂崩れで塞がつて・・・もう一つ道はあるんだけど危険らしいの」

なるほど、確かにガンナーだけで難所を行くのは難しいだろう。俺達としてもセレインが抜けてガンナーが居ない、嬉しい申し出だつた。

「でもさ、オジサマとやらを待たなくもいいのか? すぐ帰つてくれるんじゃ?」

「大丈夫、直接依頼を請けるのは別の村でそこからなら街の方が近いの。いつもこんな事があつたら近い方にいくから・・・・・」

「いつも」ということはこんな事は多いのだろうか、この娘も苦労人だな。

「じゃあ宿へ行こう、一軒しかないから貴方達も同じだよね?」

そう言つて立ち上がつた刹那、メルトラがヘビイボウガンの重さに耐え切れず後ろへ傾く。
・・・・いまさらだがこの娘、なんでヘビイボウガン使つてるんだ？

馬車から降りると、そこは白銀の世界だった。

「うへ、寒いへ、別ルートがこんな所なんて聞いてないぞ～」

「寒い、とてもなく寒い、容赦なく寒い、これでもかと雪ひまどり寒い。

「じし、仕方ないよ、こ、この道しか、な、ないんだもの」

「デリオの声の震えはどもりだけが原因じゃないだろう。

あの後、一泊した俺達は装備を整えて「別ルート」とやらに踏み込んだ。

するとそこは雪山だつたのだ。

俺達が滞在していた村は気候帯の境目にあつたらしく、街に向かうには気候帯に沿つて行けばいいのだが、その道が塞がつているので気候帯を跨いだという訳だ。

「飲んでおいて、少しば楽になるはず」

メルトラがビンを放つてよこす。

ホットドリンクと言つて内側から体を温めてくれる飲料だ、これを飲めば10分ぐらいは寒さを防いでくれる。

しかし海辺のモンスター、ダイミョウザザミから作られた『サザミシリーズ』を纏つた彼女は赤髪と相まって暖かそうに見える、見た目だけだが。

「サンキュー、メルトラ」

飲み干してからさう言つとメルトラは表情も変えずに

「メルで良い、緊急時はそっちの方が便利」

と言つてきた、これからはそつ呼ぼうと思つ。

山頂を目指す途中、洞窟があつたので俺たちはそこをくぐる事にした、繋がつていかない可能性はあつてもいきなりロックライミングよりは大分ましだ。

「いくら普段使われていない道だからって……地図も無いとは、な！」

岩場に飛び昇りながら話し続ける。

「いえ、その他にも理由はあるんです」

既に昇りきつているメルから声が返つてきた。

「村で言つた危険つてやつか？」

「うふ、ここには昔の生態系を残した飛竜が出るんだって」

「古龍ってやつか、それなら勝つ自身なんて無いぞ?」

古龍とは既に滅びた前文明から生態がまったく変わっていない、半分伝説上の生き物だ。

自然を操り、圧倒的な力を持つ彼等はギルドでも最近実在が確認されたばかりで俺達みたいな「新米卒業」レベルが手を出して良い存在じゃない。

「ふうん、もうちょっと新しい、飛竜よ、『ティガレックス』って言ひひしきの」

「ふうん、とりあえず要注意だな……お、敵がいるぞ」

俺の視界に入ったのは『ラン』と『白くて少し大きいサルのよつ』なモンスター、それが3匹だ。

雪山では比較的強い部類のモンスターだが強敵クラスではない雑魚なので楽に対処できるだろ?。

「いぐれー。」

わざと大声を上げて俺はやつらに走り寄る、俺のほうへ引きつけてメルを危険に曝さないためだ。

ガンナーは遠くから弾丸で攻撃できる代わり、近づかれると最も脆いのが特徴とも言える。

こちらで上手くフォローしないといけない。

メルのロックイーターから放たれた弾丸は正確に「ブランゴ」匹の額を穿つ。

撃つているところを見て初めて気付いたが、彼女はヘビィボウガンの重さを生かして上手く反動を殺している。

（武器は体格だけで選ぶもんじゃないって事か・・・）

ハンターとして感心しつつ、俺は速度を落とさず一体に向かつて駆ける。

隣ではデリオも別の「ブランゴ」に向かつて突進している所だ。

「つおおおおおおー」 「はああああー」

同じタイミングで俺は太刀を鞘から振り抜き、デリオは鋭い穂先を突き立てる。

振り下ろした太刀は肩口から一閃、そのまま振り抜いて喉に刃を突き立て切り裂いた。

ブランゴは地面に力無く倒れ、俺は血の付いた刀身を籠手で拭う。デリオの方もブランゴを壁に縫い付けるように貫いていた。

「ふう、思ったより楽に済んだな。デリオもメルもご苦労さん」

「はい、先を急ぎま・・・・・・」

メルの言葉が、そこで止まる。視線は俺の後ろを向いていた。振り返る、そこには、白い悪魔。

（デリオ ブランゴ・・・・・・）

迂闊だつた、下つ端のブランゴが居るなりばそれを束ねる、ドードー。
ブランゴが居てもおかしくは無い。

気付いた時には間に合わず、俺はやつての突進をもろに受けていた。

「がつ・・・・・！」

そして、落卜感。

どうやら崖のようになつた所から足を踏み外したらしい。
手を引っ掛けようにも俺の上にはドードー^{ブランゴ}が覆いかぶさる様に
している。

「くつそ・・・・・・・」

「アインさん！」「ア、アイン！」

一人の声が聞こえるが俺にはなす術などなく、

崖の向こうに、ただ落ちて行くだけだった・・・。

その10・そしてそれは銀世界だった（後書き）

執筆をしていない間に色々と考えたんですが僕の小説にはヤマが足りないと思いまして。

それで今回はこんな展開です、戦闘を上手く書けるよう頑張ります

！

その11：煌めく砂漠、光る湖面、輝くハゲ頭（前書き）

どうもすいません、また一週間以上空いたりやいました。

今、友人たちとゲーム作ってるんですよ・・・パソコンのゲーム・・・

そんな訳でさらに更新遅れるかもです・・・
申し訳ありません・・・

その11：煌めく砂漠、光る湖面、輝くハゲ頭

輝く銀世界で、アイン達が戦っている時、彼女もまた、光り輝く場所に居た。

まあ、気候は程遠いのだが。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ぶえつはー！ あつついねー、リーネちゃん！」

「暑い、暑い言わないでください・・・・・・言つだけで気温が上がります・・・」

前略、お元気でしょうか、母上様？ あなたの娘は今、砂漠で軽く脱水症状です。

とまあ、現実逃避気味に架空の手紙なんか書いてないで状況を整理しよう。

船での一件により、私はしばらく気を失っていたらしい。

雷撃を受けたにも関わらず、私は五体満足だ。

それは良い、それは良かったのだが・・・・問題なのはアイン達と離れてしまったことだ。

運命の女神様は私の事が嫌いらしい、今でも親の仇を見るような目で睨んでいる事だろう。

アインについて行くために大陸に来て、肝心の彼とは離れ離れだ。とりあえずセレインさんは中央のギルドにつけば何とかなると言つていたが・・・・・・

「あ～つ～い～、リ～ネちゃん～、なんかアレ、ファンタジックに氷の魔法!とか無い～?」

「そんなファンタジックな世の中なら絵本や英雄譚は流行りません

「辛辣しおじがつ」、もつと可愛いツツコミをプリーズ～」

こんな状況だ。

途中まではアイルーたちの馬車に同席したのだが、彼等は彼等の生活があり、

送つてもらえたのは行程の半分もいかない村までだった。

そんな訳でこの前の「護衛」と同じ要領で雇つてもらつたのだが

「砂漠つて・・・よりによつて砂漠つて・・・」

そう、煌めく灼熱の大地、砂漠だ。

暑い、暑い、暑いなんでものじやない。

同じハンターの狩場なら「火山」なんかはもつと暑いらしいが、砂漠の時点でもう無理だ。

暑さを和らげる「クーラードリンク」という飲料を持つてゐるが、これはモンスターに襲われた時に飲まないといけない。

体力を過剰に消費する戦闘で、この暑さは辛い。

身を伝う汗は集中力を奪い、照りつける陽は体力を奪い、最終的に命を奪う。

そんな訳で使うわけにはいかない。

私とセレインさんは馬車の天蓋てんがいの下、すすめの涙程度の役にしか立

たない影で、体力を温存している。

「それにしても・・・砂漠でも休める影の一つ一つはあるもんだけ
どね・・・

大当たりの大はずれだよ、いやほほ・・・」

いつも通りの笑いにも元氣は無く、馬車の端で溶けやつになつて
いるセレインさん。

まったく影が無いからここまで休まずに、馬車は旅程を進めている。

「普通はここまででもないんですね？」

「景色を楽しめる程度には楽だよ・・・いやほほ、暑こののは苦手～

そんな感じに会話をしていると、ふと地平線に違和感を感じた。
今まで陽炎以外は平坦かげなげだった地平線が、少しもり上がりしている。

「えっと・・・もしかして、岩陰？」

「おっ！ みたいだね～、オアシスとかあれば一番なんだけじね～

セレインさんの言葉に「そつ都合良よくませんよ」と返す。
そうしてくる内にも、地平線は近くなつていった。

* * * * *

「・・・おやか・・・本当にセレインさんの通り運つてなる
とは・・・」

ただの岩陰だと思っていたそれは、実は洞窟への入り口で・・・

そういうこと。その洞窟の奥に地底湖があつたのだ。

「あ～もむこ～こにゃ～」「う～くら～くだにゃ～」「か～めた～
こにゃ～」

馬車を管理する業者であるアイルー（船の時は別の人？だ）達も
くつろいでいる。

「ほんな都合の良こ事つて・・・アイルーさんたちも知らなかつた
みたいだし・・・」

「こやせせ、一流のハンターとしては運も必要だよ～」

もはや運つてレベルじゃないと思つんですけど・・・。
まあ、そんな嬉しい偶然に感謝しながら水を口に含み

「ヒカルや、ワーネちゃん？」

「？」

「アイン君といづなの？」

吹いた。

「つていきなり何の話題ですかあー。」

「いや、まあ、女の子としては他人の恋愛事情は気になるものな
ですわ」

駄目だ、完全に分かつていいみたい。

「はあ、伝わるよつに色々したるんですけどね。駄目ですよ、朴念仁」「うそよ」

「ふうん・・・ま、大変だね。

何かあつたらオネーサンに相談しなさいー。リーネちゃんはもう実の娘のようになつたー」

「あ・・・妹とかじゃないんですか」

空気が　というかセレインさんが凍つた。

「あ、はは、うふふー、年齢、ちよつと、ばれひやつたー、あはは、うふふー」

「だ、大丈夫ですよ！ 子供産んじやうよつな年齢でもまだ若いですって！」

「うふふ・・・リーネちゃん。女はね、子供を産んだら一気に老けるのみ・・・」

「あ、お子様いるんですか・・・？」

私の次の言葉で、セレインさんは完全に碎け散つた。放心状態だ。

(うわー、嬉しい氷の魔法、使えちやつたー)

ズガアアアアアン！

その時、外で轟音がした。
何か重い、とても硬いもので岩を叩いた音だ と思つ。

「セレインさん！ 様子を 」

「あはは、うふふー、ごめんねー、ママ、一人で旅に出ひがつてごめんねー」

「ああ、もう！ 肝心な時に役立たず！」

彼方にいる息子だか娘だかに語りかけるセレインを無視し、洞窟の外へ向かう。

そこで見たものは

「くははははー！」の程度のモンスター、屁でもないわあ！

頭がへこんで倒れ付す首領砂竜、ドス ガレオス

そして太陽を照り返す、ハンマーを持ったスキンヘッドだった。

その11：煌めく砂漠、光る湖面、輝くハゲ頭（後書き）

はい、今日はリーネ視点のお話です。

パーティを一つに分けたのは新キャラが出したかったのが一番の目的ですのでこっちの視点も書いてます。

今回はギャグが多めですが・・・自分のユーモアセンスは微妙なのでギャグになつてないかもですね（笑）

その12・再び雪ヨ、一対一（前書き）

えつと・・・・・前回の更新から一ヶ月近くたつてしましました。
・・。

戦闘描写を考えているうちにテスト期間に入り、その後も「いたいた」としていて・・・すいません。

パーティが二つに分かれているので、これからも交互に物語が進んでいくと思います。

その12・再び雪山、一対一

場所は雪山、時間はアイン達が来る10日前、そして彼等は・・・

「・・・機器全て順調、問題は見受けられません・・・しかし、大丈夫でしょうか？」

白衣の男、そのうちの一人が呟く。

近くには、彼らがの物と思われる寒冷用装備^{マフモフ}が無造作に脱ぎ捨てられている。

「大丈夫か、とは？ 今日はただの実験だ、遺跡は痛いが村の一つや二つ構わんよ。

完成すればいくらでもやり直せる」

冷酷で、単調で、どこか平たい声が、「施設」に一番近い男から発せられる。

その「施設」は、この世界のどこでも見かけられないような物だった。

様々な色を見せ、そして映るものが変化するガラス。

磨き上げた大理石よりも、光る湖面よりも美しい床や壁。

肝心の施設には、よく分からぬいでつぱりが多数あり、不思議なガラスの数も一際多い、

そして・・・・・・

グウウウウウウルウウウ・・・

縦に長い水槽に鎮座するそれ。

「しかし・・・不気味ですね。今までの遺跡とは全然違う物ばかりじゃないですか。

それにこの技術・・・触れても良いものなんでしょうか?」

「あるからには、我々の祖先は使っていたのだろう。

今更怖気づくな、何のためにこいつの討伐をハンターに依頼したと思つてゐる」

「す、すいません。・・・起動は10日後に設定致しました」

それはアイン達の来る10日前の出来事。

静かに、静かに、水槽の中の赤銅色は出番を待つていた。。。

鎧を着ているにもかかわらず、腹には鈍痛が残つている。だが、その痛みが俺の意識を繋ぎ止めてくれていた。

「くつそ・・・こんな簡単に死んでたまるかよつ!」

声と共に渾身の力を込めて、俺の上から「ドブランゴ」を引き下ろす。しかし、地面まで あと3メートル。

(間に合つか・・・)

重力に逆らうために、俺は全力で「ドブランゴ」の腕を掴み、自分の体を持ち上げる力を入れる。

その努力は功を奏し、あと1メートルという所で「ドブランゴ」は俺

の座布団になつている。

「しつかり、受け止めろよ！ 僕の代わりにな！」

地面に、激突。

グオオオオオオオオ！

俺も肺が壊れたかと思つほどどの衝撃があつたが、奴のダメージはそれ以上のはずだ。

ドドブランゴはまだ動かない、今の内にと思つたが俺もよろよろと歩く事しかできなかつた。

腰の部分を探り、『回復薬』を一気に呷るように飲む。
肺の違和感は消えていき、腹の鈍痛が緩やかに引いていく。

しかし・・・

「やつぱり、そつうまくはいかないか」

見てくれるのはたつた一人　いや、一匹だがそれでも肩をすくめる。

ドドブランゴが立ち上がりついていた、ダメージはあるだらうが致命的ではなかつたようだ。

グオオオオオオオオ！

吼える、奴の雄叫びには手下のブランゴを雪の下から呼ぶ効果があるらしいが、ここは洞窟内なのでさすがに駆けつけられないようだ。そして、洞窟のこの空間にモンスターは一匹も居らず、ここと外界を繋ぐ場所は、上しかなかつた。

「久しぶりの一対一か・・・・・・勘が鈍つてなけりやいいけどな・・！」

「ランゴとの戦闘後、一度収めていた太刀を抜き放つ。

敵も臨戦態勢に入り、正面から向かい合ひ形になつた。

勝負は一瞬、と東方のサムライのようにいけば楽なのだが、如何せん自分とモンスターとでは体力も腕力も臂力も違ひすぎる、慎重に戦わなければ。

グオオオオオオ！

先に動いたのはドドランゴだつた、地面の氷を掴み、固め、雪玉のようにして投げてくる。

その数、4。

「くつそ！」

間を抜ける方法もあるがリスクが高い、横に倒れこむようにして跳ぶ。

鎧越しに衝撃と、氷の冷たい感触が伝わつてくるが今は無視だ。そのまま転がるようにして奴との距離を空ける、ただの目的になるつもりは無い。

グオオオオオオ！

再び雄叫びを上げるドドランゴ、鼓膜が震え、生理的に身が竦みそうになる。

それを抑え立ち上がる。

「はつ・・・はつ・・・はつ・・・やつぱ、一人は辛いな」

誰ともなしに咳く、やはり久々に一人で狩ると辛く感じる。しかし、敵はそんな事もお構い無しに走ってきた。

「いつまでもやられつ放しでいられるかよ。」

再び回避 そう思わせるフェイントを入れて、先ほどの位置から5歩の位置で踏み止まる。

そしてダイニングケを含む世、そのまま横薙ぎに太刀を振る。

ギヤアアオオオオオ！

俺が反撃できると思っていなかつたのか、大仰な叫びを上げるドド
ブランド。

その隙を見逃せるわけに無し
体の向きを変え
踏み込み
怒叫び
を上げ、斬りかかる。

突き、振り上げ、振り下ろし、子供の頃から師匠たるハンターに仕込まれた型は基本にして単純な物。だがそれ故に汎用性があり、どのような体勢からでも放ちやすい利点がある。

斬る、斬る、斬る、斬激の嵐が白い毛皮を包み込む。

振るつた腕が、支えた腰が、踏み込んだ足が、全て疲労を訴える。だが、これで戦況有利だ。ここから巻き返・・・・・

声が聞こえた。叫び、音による圧倒的な暴力。目の前のドドブランゴではない、奴も今の声に驚き辺りを見渡して

いる。

「チツ、これ以上状況が悪くなつたらどうじろつていうんだよ・・・

「

今度こそ誰も見ていないが悪態をつく、これ以上来られたら本当にヤバイ。

だが、この畜はおそらく強敵だ。

フルフルの声が生ぬること思える轟音、振動が身を揺らす、聴覚の
蹂躪。

そして次の刹那、脱出不可能のはずの古盤が、いとも簡単に、崩れ去つた。

その奥にはよく分からぬ部屋があるが今はそれどころではない、目の前のこれが問題だ。

野生そのものの雄々しき体躯、ヒレにしか見えない様な翼とその大元である太い腕、

体勢を低くしてこるその姿はファイティングポーズを彷彿とさせる。

「こにはね昔の生態系を残した飛竜が出るんだって

メルの言葉が脳裏をよぎる。

この圧倒的な野生、存在感、脅威、こいつが

「ティガ・・・・・・レックス・・・・」

呆けている俺を余所目に、ドドブランゴが果敢にも立ち向かつていく。

しかし、いとも簡単に邪魔だとでも言つ風に踏みつけたティガレックス。

喚いても騒いでも放さず、最後は頭部を噛み千切られて絶命した。

「・・・・・マジかよ・・・」

確かに野生は、確かに敵意を持つて、俺へと近づいてきた。

その12：再び雪山、一対一（後書き）

久しぶりだけぞやつぱり短いです、戦闘が長く書けないのは欠陥ですね・・・アハハ・・・。

「ドドブラン」は完全に噛ませ犬になってしまいました（笑）

その13・そして現れた謎の飛竜（前書き）

いつも、お久しぶりです。

恐怖の冬期講習・ヒート塾が終了し、小説を書き始めたんですが……会話が多くなる……。

何度か手直しするうちに、これだけ時間が過ぎてしましました、一応形にはなりましたが上手く書けていないかもです。

4月までは更新が遅れがちになると思いますが、よろしくお願いします。

その13・そして現れた謎の飛竜

「」は砂漠の最奥。

長い砂漠の道のりを越えた後、岩と岩に挟まれた空間を発見するしかここに至る道は無い。

少なくとも、人間には。

そしてそこには、电脑と金属と知識の部屋。

この場所は、一部の人間に「遺跡」と呼ばれていた。

この場所は、遙か太古よりここに存在する。

この場所は、生命を弄ぶためだけに造られた。

そして「」の場所は、再び動き出した。

「」やはは、こんな所で会うなんて奇遇だね~」

「おう! 一人旅になるかと思っていたが、こりや幸先が良いわい」

地底湖のある洞窟、そこで小さな祭が開かれている。

真ん中にいるのはセレインさんと……さつきのスキンヘッドさん。

「美味しいニヤ~」「満腹ニヤ~」「食料大開放ニヤ~」

アイルーの人たちも思う存分くつろいでいる。

平和だ。

限りなく平和だ。

「じゃ無くて… どうして酒宴やつてるんですかあ…」

あのスキンヘッドさん、名前はレオニア・ブラウンドといつらしい。少なくとも中級者以上の腕があるこの男性、セレインさんの知り合いだと言つてゐる。

あの底が知れない女性ハンターは、やはり人脈の面でもすごいみたい。

うん、それは良い、この人がすごいのはつくづく身に染みている。

問題は

「どうして！ こんな所で！ オ酒なんか飲んでるんですかあ！」

この人たち、合流したら前触れもなくナチュラルに酒宴始めやがりましたからね。

「いやいやリーネちゃん、大人のお付き合いでお酒は必須だよ？」

「やうだそだ！ いやとうらしく水も飲んでねえんだ！」

「この駄目人間め…………！」

そのくせ酒には強いみたいで頬が赤くなるだけで全然酔つてなかつたりする。

「まあまあ、リーネちゃんも一杯！ ハンターの円滑なお付き合いでお酒は必須だよ？」

「いりません！　ていうか私はハンターじゃありません！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「で、レオ。どうしてこんな所でこんな事やつているか教えてくれる？」

「まつたく、もう少ししゃくり飲んでも……すまん、すまんかつたセラ」

飲み続けるレオニアさんを、セレインさんは一睨みで黙らせる。二人とも愛称で呼び合っているし、仲良しみたいだ。

「いやまあ、この近くの村がモンスターに襲われていると聞いてきたんだ」

「近場のハンターが処理するだろに……悪い癖よね、正義の味方」

話が始まつたけど全然口を挟む余地がない、というか挟める知識もない。

大人しくアイルーと遊んでおく事にする。

「困っている人を助けるのは当然だ、メルならば一人でも街に行けるだろうしな」

「…………ちょっと待って、メル放ってきたの？　ていうかメルを連れてるの？」

「当然だ。修行を頼んだのはお前だろ？」

「いやいや、私は全然何も……あの子、またそういう嘘を……。」

「なにい！　アレは嘘だったのか！？」

「いい加減慣れなさいよ！　何回騙されてるの！？」

なんだかアイルーのお腹を撫でてこうつむに口論になつてこる。とりあえずアイルーが気持け良さうなので撫で続ける。

「…………はあ、まあいわ。すぐにメルの居た村に戻りなさい、命令よ！」

心なしかセレインさんが怖い、普段はあんなに飄々（ひょいひょい）としてるのに。

まあ関わるのも嫌だからアイルーのお腹を撫で続ける。

「ふにゃあ～」って声でこつちまで和んでくる。

とりあえず平和だ、レオニアさんは震え上がっているが。

「い、いや、だが！　俺にも帰れぬ理由がある！」

レオニアさんがしどろもどろになりながらも弁解を始める。

「へえ、それは何なのかな？　くだらない事だつたら三枚に下ろすよ？」

「くだらぬ事ではない！　倒しても倒してもドスガレオスが呪きなのだ！」

レオニアさんが話した瞬間に、セレインさんが訝しげな顔をする。

私も耳を疑つた。

「いやいや……仮にも群れを束ねる首領級なんだし……生死はきちんと確認したの？」

「かれこれ10体は倒しているはずだ、これでも見間違えているならば引退の時期かもな」

鼻を鳴らして答えていたが、内容は深刻なものだった。

ドスランポス、ドスゲネポスなど「ドス」の名を冠するモンスターは群れでの長という意味だ。

群れを束ねる一際強力な個体、飛竜よりは珍しくないとしてもそう易々と現れていいものではない。

それが、何十四もということは生態系が狂っている可能性もあるといふことだ。

「始めはドスガレオス六体にリオレイア一体の討伐依頼だったのだ。リオレイアを倒し、ドスガレオスも全て片付けたと思つたら……何頭いるんだ、奴等」

といふか元の数だけで十分すごい、一人で請ける量じゃないと思つ。

「はあ……ていうかそれは、ギルドに報告しなきゃだね。

「とりあえずヤバいんだつたら私設部隊を派遣してくれるはずだし」

私も頷く、ギルドの私設部隊は情報収集を得意とする集団だ。
ギルドナイト

まあ、裏で暗殺や制裁をやつているといふ噂もあるが一介の受付嬢には知る余地も無い。

「ふむ、やはり俺一人では無理があるか……分かった、ここは退こう。

となれば、まずは街へ向かうべきだな

「あつせつ……………メルは見捨てるんだ?」

再び睨む、再び竦む。

なんていうか話が進みそうに無いのでさすがに口を挟む。

「セレインさん、話ぐらい聞いてあげましょつよ」

「むう、分かった。リーネちゃんの心の込めて感謝しな

「おお…………感謝するぞ、リーネとやう。

実はな、メルとは街で合流すると話しておるのだ。

ギルドへの報告の件もあるし、やはり街へ向かうのが一番だらう

と思ってな」

と、話をまとめたのが20分前。

灼熱の大地に燃え盛る太陽、アイルーたちの荷馬車はきちんとついてきている。

地底湖に入る前と変わった点は、レオニアさんが加わった事だ。目的地が同じなので一緒に旅をする事になった、頼もしい。うん、この状況では限りなく頼もしい。

ギャアオオオオオオオオオオ！

ほら、こんな状況だしね。

「セレインさん、あれってなんなんですか！？」

荷馬車は走る、逃げるよひこといつか実際逃げている。

「知らないよ！ 私もあんな飛竜見たこと無いー！」

後ろから追つてくる飛竜、姿形はリオレイア（リオレウスの雌はこう呼ばれる）に似ていた。

色は砂漠と同じ色、つまりは保護色だ。リオレイアは緑色なので違和感を感じる。

でもここまで普通だ、飛竜にも色違いの『亞種』と呼ばれる種類が存在する訳だし。

一番の問題点、それは 潜っている事だ。

砂漠を泳ぐように追いかけてくる、その速度は半端ではない。ドスガレオスや角竜ディアブロスなどの限られたモンスターは地面の下を泳ぐ事もできるのだが……それらは全て飛行能力を犠牲にした、飛竜という呼び名が似つかわしくないものばかりだ。でもそいつには翼があった、その下にドスガレオスのようなヒレがついているのだ。

体中に背びれがあるものの、それは少し歪に見えた。

「あつはは……速いねえ……。便宜上、ガレオレイアとでも呼ぼうか？」

セレインさんも軽口を叩いてはいるが、顔は畳然としている。

私もびっくりだ、新種のモンスターなんてこんな時に出てきて欲し

くない。

「ふむ、それでよからひ。

よし、追いつかれるのも時間の問題だ。それぞれ準備しておけ」
その中において、唯一レオニアさんは悠然とそいつの背びれを見下
ろしていた。

とりあえず、私は厄介事に巻き込まれる才能があるみたいだ。

その13・そして現れた謎の飛竜（後書き）

オリジナルを出しました。

……別に「ヒヤッホウ！ せつかく小説書いてるんだから無駄にオリジナル出しちゃうぜ！」って訳じゃないですよ？

きちんと理屈があつて出しました、勢いじゃありません（笑）

その14：激突の赤銅、碎け散る信念（前書き）

なんだかこの更新ペースが根付いてしまいました、元々他の方のより短いのにすいません。

実はあと一週間ちょっとで受験だつたりします、受かれば更新ペースが速くなると思いますが、落ちたら…………。

その14：激突の赤銅、碎け散る信念

耳が、鼓膜が碎けるような咆哮が響き渡る。

距離を置いているので耳を塞ぐほどではないが、やはり辛い。

「なにもこんなナイスタイミングで出てきてくれなくとも……」

「ジーラン」を倒した今、ティガレックスはファイティングポーズのような低姿勢を解いて辺りを見回している。

気づかれて無ければいいなあ。

一応 太刀を收めて忍ひ足で移動してみた

グルウ？

駄目だ、やつぱり気付かれた。

瞬間、奴は頭を下に 前足を弛ませると しゃがみ、戦闘姿勢にそのまま爆発するような勢いで前足で地を蹴り

「どうやったんだ？」

空気を切り裂き、こちらに向かつて飛び込んできた。

無様に頭から滑り込んで回避
できた！

の立つていた位置に平然と立つている。

ティガレックスの双眸がこちらを捉える、しかしそれと共に俺も奴と逆に転がつた。

結果、ティガレックスの爪が空を薙ぎ、数瞬だけ隙が出来た。その間に両手に力を込め、跳ねるように立ち上がる。結構腕が痛いのだが言つてる場合じゃない。

「ていうか、シャレにならないな」「イツ……」

「う喋つてゐるうちにもティガレックスは次の行動の準備をしている。

前足と、今度は後ろ足にも力を込めている。今度は跳躍ではなく突進のようだ。

跳ぶのではなく走るのならばさつきよりも速度は遅いはず、そう思い全力で横に走る。

こちらのスタートの方が奴より少し早い、そのおかげでかわす事ができた。

「何度もカツコ悪い避け方してられるか……よ!？」

だが、次のティガレックスの行動は、完全に予想外だつた。自らの加速の勢いを前足で止め、慣性のままに体を浮かして方向転換、そして再び突進。

さすが古き種族、地上への適応は飛竜よりも高いようだ。

（とか、考へてる場合じゃないな……）

考へるのは一瞬で済むが体を動かすには少しの だがこの状況では絶望的なまでの時間がかかる。

それならば 残された時間で考へろ、生き残る術を。お前はここで終わるのかアイン、生きたければ考へろ、考へろ、考へる。

体に突進の風圧を感じるほどになつた時、思いついたのはそれだつ

た。

『飛竜刀』【紅葉】を鞘ごと、背中から引き抜いて

「！ あせこへ」

凍った地面に突き立てる。

太刀は丁度テイガレッカノの指と指の間に挟まる形になつた

ティガレックスはさらに力を入れ、鞘をへし折ろうとする。

だが、備も遠方向から両手を添えて押し止める。これは最後の手段だ、太刀は元々攻撃を受ける

人間同士なら鎧迫り合いというのもあるらしく、やはり人間の細い刃とモンスターの力強い爪では力の差がありすぎる。

」
「
！
」

そして鞘で補強しているとはいえ、現在も好ましい状況ではなかつた。

添えた手が裂けそうになる、肩の関節がミシミシと音を立てる、鞘からビシリと欠けるような音がした気がした。だがそれでも抑えきらなければ、生き残れない。

腕が壊れそうだ、太刀もそろそろ危ない。
もう駄目か、そう思った時。

ボウガンの発射音が、聞こえた気がした。

* * * * *

メリヒデリオは、洞窟から出て雪山を歩いていた。
洞窟の中からでは降りられる足場が見つからず、外に違う入り口が
無いか探しているのだ。

「で、でも、ももしか、だ駄目だつたら……」

「その場合は、一度村に下りて梯子でも探してくるしかない」

メルもデリオもこの山に来るのは初めてだ、見つけられない可能性も十分にあつた。

二人はしばらく無言で歩く。

「…………ね、ねえ…………や、やつぱつ…………一度む村に帰つた方が、いい、いいんじや？」

「……かもしだれないね。きちんとした道順も分かつていの私達が、探せるわけ……」

メルがそこまで言つた時、雪山に大きな、大きな「音」が響いた。

「おおひるいん！？」

「ここの音……ううん、ここの声はティガレックス……？」

まさかこんな所で出会いとは、と辺りを警戒したメルだが周辺にその姿を確認できない。

「もう一度聞いたその声を、メルは今度こそしつかりと聞いていた。
「べぐもつた音……とこり」とせ洞窟内かも……」の近くに、空間
が……」

「この近くに入り口があるかもしません。
とはいって、アインさんが居るかは分からぬけど……」

言いながら、メルは雪が積もっている山肌を探り出す。

「わわわかった、入り口を、さ探せば、いいんだね？」

そして、デリオも、雪を搔き分けて何か無いか探し出した。

「とりあえず入り口なんか無くても、岩が薄い所さえ見つかればこの洞窟は構造上丈夫そうだから、崩していけば……」

一人は岩肌を探り、時には叩いて厚さを調べ、そしてまた探し出す。

そしてしばらく後、メルは手の先に違和感を感じた。

「……な、何？」

デリオも近づき、一人で雪を除けていった。

「これは……金属？」

「う、うん……それに、普通じゃな、ない。じ、人工物みたい……」

その金属は広い面積にわたって指肌を覆つており（金属が洞窟内で貴いでいるのかも知れないが）、とても自然にある物とは思えない。

「これは……」

呟きながら、メルは金属を籠手の部分で叩く。

そうすると硬質ながらも軽い音が返ってきた、ざつやや大した厚みは無いようだ。

「い、これは……もしかしたら、い、壊せるかも……じ、じいてい
て」

指示通りにメルが下がる。

そしてデリオは肩口から勢いよく金属にぶつかった。

「う、うわあ！？」

果たして金属は簡単に壊れた というか、外れた。
どうやら蝶番の扉のような造りになつていたようだ。
しかも老朽化していくようで簡単に外れる、よつてデリオは無駄に
ずつこけてしまつた。

「あれは……！」

しかしメルはそれに構つている余裕など無かつた。
飛竜と、それを必死に抑えるアインを発見したからだ。
さらに言うならば、その光景は妙な機材に囲まれた空間を隔てていたのだが、そんなものを視認する前にメルは行動に移る。

「なんでいきなりこんな事に……！」

背中に背負つていた大砲を下ろし、構え、装填する。
ヘビイボウガツ

通常弾だが、どうやら氣を引く事ぐらこはできたようだ。
ティガレックスがこちらを向き

「ティガ……レックス？」

違つた。

その飛竜はティガレックスに似ているが、違う。

つて、いふようなものだ。

だがこの飛竜は、リオレウスのような赤銅色の甲殻を持つていた。それ以外にも前脚にオマケのように付いているはずの翼が異様に大

きい事、尾の形状の違ひから別種である事がうかがえた。

「何……？ 見たこと無い、これ……」

メルが呆然としている時にも、敵は動く。

火炎弾 ティガレックスならば吐くはずの無い が、その飛竜の口から放たれる。

一瞬ボウガンを捨てて横に飛びかけたメルだが、火炎弾との間にデリオが立ち塞がつた。

「あ、危ないよ、メルちゃん……ボーッとしないで……」

デリオが構えた盾に当たつた火炎弾は、霧散して氷を溶かした。

「『い、ごめん……なさい』

一時混乱していたメルだが、デリオの言葉で目が覚めたようだ。そして、正気に戻つたメルは氣づいた。アインが先ほどの位置のまま、先ほどの彼女のように立ち尽くしていることに。

「アインさん！ はやくこつち、！」

叫びかけた時、メルは氣づいた。彼の足元にある残骸に、残骸になつてしまつたそれに。

アイン・フレンツの太刀は、中途から真つ二つに折れていた……。

その14・激突の赤銅、碎け散る信念（後書き）

はい、こちひでもオリジナルです。

ていうかもう半年近くやつてるのに全然進んでないですね……街に着いてからが本番のつもりだったのに（泣）

最近感想に飢えてます。

お時間のある方は、ぜひこの卑しこそ一めお恵みを…（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6327c/>

モンスターハンターズストーリー

2010年10月14日11時57分発行